

# 隆瑜撰『五輪九字秘釈拾要記』の研究(4)

福 田 亮 成

大正図像部一  
二

430/4

〔五部〕とは、『秘蔵記本』<sup>五四</sup>に云う、「一には蓮花部、吾が自身の中に淨菩提心清淨の理有り。此の理は六道四生界を経て生死の流中に流転すと雖も、而も不染不垢なること蓮花の泥中より出生して、而も不染不垢なるが如し。仍て蓮花部と名く。二には金剛部、吾が自心の理の所に、又智理有り。斯の智は生死の淤泥に没在して無数劫を経と雖も、而も朽せず、壞せずして能く諸の煩惱を破し、金剛の久しく地中に埋むと雖も、而も朽せず、壞せずして、諸の怨敵の固物を催破するが如し。仍て金剛部と名く。三には仏部、斯の理、斯の智、凡位にては未だ顕われず、理智具足し、覺道円満するを即ち仏部と名く。又二を加えて名を五部と曰う。一には宝部、仏の万徳円満の中に福徳無辺なるを宝部と云う。二には羯磨部、衆生の為に悲愍を垂れて一切の事業を成弁するを羯磨部と名く」と文。『秘蔵記杲宝鈔』に云う、「此の書は、仏部の中に於て宝・羯の二部を開き。仏徳の中の自証の辺を仏部と云い、

『大正』一八・  
八九八c

431/1

『大正』一八・  
八九八c

化地の辺を羯磨と云う。身の本説、台の万タラなり」云。此の解『藏記』の文に応ず、見るべし。又『都部要目』<sup>丁初に</sup>云う、「瑜伽の本経は、都て十万の偈あり、十八会有り。初会の経をば一切如来真实経と名く。其の経に五部を説く。仏部（毘盧サナハ仏を以て、部主となす）。金剛部（阿闍私を以て、部主となす）。蓮花部（阿彌仏を以て、部主となす）、羯磨部（不空成就仏を以て、部主となす）と文。又『両部万タラ功德略抄』<sup>遺教録 第二ノ四十一丁に、</sup>三部・五部を出す。五部は『都部要目』に同じ。両部共に三部・五部に通ず。部とは、宝師の云う、「部類、種族の義、主伴に通ず」云。『心月輪秘釈』九<sup>右十五</sup>に云う、「部とは部類・種族等の義」と文。又万タラに約して胎は、仏部を中となし。蓮・金、次での如く右・左となす。金は五部に約して五解脱輪を因して五部主を安ず。上に述ぶるが如く、然も胎万タラを五部に約す。（藏記）『杲宝抄』に云う、「寂師は未可となす。按じて云う、「胎は中筋、皆な是れ仏部の故に。釈迦・虚空藏共に是れ仏部云。今按ずるに除蓋院は是れ羯磨部なり、是は金剛手従り開出す、是れ金剛部従り羯磨を出す。亦之に合し、則ち金剛部に合するなり。地藏院を宝部となす。是れは蓮花部（觀音部）従り宝部を開くなり」云。又『四種万タラ口決』<sup>七</sup>に、「問う、宝部・羯磨部、何れに撰するや。答う、通じて三部の撰なり。問う、如何んが通じて三部の撰なりや。答う、三部の宝の義、宝部と名け、三部作業の義を羯磨部と名く」と文。『藏記』と異なるなり。按ずるに『十八会指帰』に、「五部互に円融の義を説く、見るべし。仮に五部を施設すれば異有れども、本元に於て即ち一体なり」云。之に依て按ずるに、五部の

431/2

体に約すれば、円融の故に上の『口決』の如く、一の義辺に就くか。『蔵記』の説の如く、胎の万タラの本説有る故に、其の義辺に約するか。寂師の義も、一途の義辺に約して相違無きか。『拾要記』<sup>蔵記第三</sup>を見るべし。又『舍利供養式』<sup>秘釈第二</sup>に云う、「謂く五輪とは、即ち五部の諸尊の形なる故に」と文。此の文に依て、今の句に五輪を五部と云う、文勢解すべし。重ねて愚按ずるに、『東記』<sup>左七</sup>第四に云う、「疏」第十六に云う、阿字方形、縛字円形、囉字三角形等」と云。之を以て之を思うに、阿等の五字、其の形即ち五輪の故に字の外に五輪無し。五輪の形色一々に軌持軌則の故に、此の外に五字無し。

又五輪五字重立の形像は、即ち人形なり。智奉法界の印契の所在、甚だ深義有り。又上人の『五輪九字秘釈』の中に、其の秘決を載す。是れ即ち両部大日は一切人体の本形、即ち又五輪なり。当体不動転の羯磨身なり。是の故に事理不二、人法一体の義、六大の位に於て其の意顕了なり。阿字は、即ち最初開口の声が故に、本初不生の義有り。本初不生は、即ち諸法の所依安住不動転のためなり。是の故に地大は、方形を現し。又所依と成つて諸法をして増益ならしめる故に、是の故に黄色なり。是の如く顯・形・表等に異ると雖も、義趣一致にして相離れず。故に阿字を不生の地大となす。縛字離言等の義門、之に准じて之を思うべし<sup>聖王</sup>。此の弁に准じて之を思え。開山の羯磨図は、第十六『疏』、及び經の意に依る。且く宗家の釈に基づき之を凶したまうか。両印在る所に深意有りとは、実に以て

深意有るべし。上に於て愚按出すと雖も、尚を知法人に之を尋ねよ。

〔五部為五智〕とは、因に五識・五智・五仏を積すとは、謂く転識得智。識は謂く八識、阿頼耶を転じて大円鏡智を得る等なり。人に約せば阿闍仏等と名く。『菩提心義』第九十六に云う、「高野和上の伝える所、『牟利万う経』の文に一紙有り。前来の『牟利万う経』には、此の文無し。此の和上、亦た『大蓮花三昧経』の文、及び我今奉獻せる諸供養等偈、並に依て云う。正しくの呪願の文と云う。我が国に伝う、相伝に云う、和上、船に乗上する時に、小師追つて此れ等の経文を送る。故に且く之を用う。彼の文に云う、第九阿摩羅識、即ち転じて法界体性智と成るが如し。又金剛智なり。此の智の身業は、毘ルサナなり。口業は、普賢菩薩。意業は不動金剛なり。第八阿ラ耶識転じて大円鏡智と成る。又不動智なり。此の智の身業は盧遮那仏。又阿闍仏の口業は、文殊師利菩薩、意業は降三世金剛。第七の末那識転じて平等性智と成る。又灌頂智なり。此の智の身業は宝生如来、口業は虚空蔵菩薩、意業は軍荼利金剛なり。第六意識転じて妙觀察智と成る。又蓮花智なり、又は転法輪智なり。此の智の身業は無量寿如来、又は阿弥陀。口業は觀世音菩薩、意業は六足尊金剛なり。眼耳鼻舌身、此の五識転じて成所作智と成る。又羯磨智なり。此の智の身業は、釈迦文仏、又は不空成就如来なり。口業は金剛業、意業は摩訶業又金剛變。此の文有りと雖も、頗る相違有り。今、和上の小悉曇に依り釈して云う、第九唵摩羅識を転じて法界体性智と成る。

第八阿頼耶識を転じて大円鏡智と成る。第七末那識を転じて平等性智と成る。第六意識を転じて妙觀察智と成る。五身識を転じて成所作智と成る（已上菩薩藏心云）。『即身義』に云う、「因位には識と名け、果位には智と云う」。言わば識は了別を義となし、智は決断を義となす。因位には識の用強し、所以に識と名け、果位は智の用に強し、所以に智と名く。『唯識』第十三に云う、「此は有漏の八と七と五との識、相応の品を転じて次での如く而も智を得る。識に非ずと雖も而も識に依て転ず。識を主となす故に転識得智と説く」。又は有漏の位には、智劣にして識強し。無漏の位の中には智強くして識劣なり。有情を勧めて智に依て識を捨てしめ、故に八識を転じて而も此の四智を得ると説く。『述記』十五に云う、「識は是れ分別なれば、有漏の位強し。智は決断するため無漏の位に勝る。強を転じて強を得る故に、得智と言う。此の中に識を捨て智を得ると解するに因て、因に更に智と名くる所由を成ず」と文。今、按ずるに唯識の意は、識は是れ心王、智を心所となす。故に智雖非識等と云う。然るに密教の性相は、恐らくは彼と同ぜず。云何んが知るとならば、因の八識を転じて果の五智となす故に、体是れ一心にして智を心所となすには非ず。若し爾らば、転の言は、但し是れ転変にして、転捨の義に非ずなり。義をもつて推するに是の如し。然れども未だ明抛を見ず。且く其の例を挙ぐ。三摩地とは、心所の名なり。然るに『禪要』に云う、「三摩地とは更に別法無し。直に是れは一切衆生の自性清浄心なり。名けて大円鏡智となす」と

文。又『聖位經』に云う、「毘ルサナは、内心に於て自受用の四智を証す」と文。円鏡智・平等智・妙觀智・成所作智なり。外に十地満足の菩薩にして他に受用せしむるが故に、四智の中従り四仏を流出す。各本方に住して本座に坐せりと文。此は五智を一時に証得すること  
を明す。唯識の平等・妙觀・初地に分得し、大円と成所と唯だ仏果に起ると、其の義大いに異なり。又第五<sub>五十七</sub>に云う、「内心妙白蓮とは、此は是れ衆生本心の妙法、芬荼利花の秘密の標幟なり。花台八葉円満均等にして正しく開敷せる形の如し。此の蓮花台は、是れ実相自然の智恵なり。蓮花葉は是れ大悲方便なり。正しく此の蔵を以て大悲胎蔵万タラ之体とす。其の余の三重は、是れ此の自証の功德従り流出せる諸の善知識、又法界門なるのみ」と文。此の文は五智・五仏は、是れ心王にして、其の余の三重の心所の諸尊とするを明し、四智は是れ心所に非ざるを明すなり。又『理趣釈』に、四種自覺性智と云う。此等の文意は、因の妄分別の義を転じて果の決斷の智となすことを明す。識智体一にして因果を果とす。応に知るべし、顕密の性相本より自から異なる故に。『疏』中に往々に、此經密義と云うは、此の義を示す。学者応に思うべし。識を梵に云う、尾枳攘<sub>ニヤ</sub>と。智を<sub>ミヤ</sub>と云う。<sub>ニヤ</sub>は是れ種々の義、異の義。<sub>ミヤ</sub>は智なり。<sub>ニヤ</sub>は<sub>ミヤ</sub>を助け、則ち名けて識とす。了別を義とす。即ち種々の分別なり。例えば『唯識』第六<sub>三十一</sub>に云うが如し。「有る義は（大乘の異師、即ち不正義なり。恐らくは是れ性宗の義なり）。此の疑は、恵を以て体とす。猶し預り簡択する

『定弘大全』  
五・一二四

『大正』三三一・  
五七三c 必ず  
しも一致せず

『定弘大全』  
五・一二五

『大正』三三一・  
五七三c

を説いて疑とす。故に毘を以て未底すを助く。是れ疑の義なるが故に、未底と般若と異なること無きが故に。又正義家は異師を難んじて云う、毘を以て未底を助く、恵を執して疑すとなせば、毘は、若南を助くるを以て、智を識に応ずべし」と文。今、此の中は彼の異師の義と同じ。毘は、**き**を助くるを、即ち名けて識とす。本具の無分別智、煩惱の所染となし。種々の妄分別を起す故なり。**か**は、**き**を助け名けて識とする故に、識一にして相宗の識智別体と同じからず。次に別して五智の義を明さば、大円鏡智、梵に摩訶大底摩円灑耶鏡枳攘二曩智と云う。『秘蔵記本』右五に云う、「大円鏡智とは、謂く自他の三密に遍際有ること無し、之を名けて大なり、具足して欠かけざるを円と曰う。実智高く懸て万像影現するなり。鏡之喻なり」。是れ阿闍仏金剛堅固の菩提心なり。『菩提心論』に云う、「東方阿闍仏は大円鏡智と成るに由る。亦是金剛智と名く。故に**え**字を種子となす。**え**字を金剛大恵と名く。謂ゆる菩提心の体なり。次に平等性智、梵には三昧耶等平跢耶性と云う。『蔵記』に云う、「平等性智とは、性淨の智水は情非情を簡ばざるが故に、彼此同如の故に、常住不変の故に、名けて平等性智と曰う」と文。清淨の智水は、即ち是れ灌頂の水なり、是れ宝生仏、福德莊嚴の心なり、故に**ふ**字を種となす。『菩提心論』に云う、「南方宝生仏は平等性智を成ずるに由て、亦是灌頂智と名くるなり」と文。問う、此れ等の文に依つて、水は是れ南方平等性智なり。何故に『悉地軌』に**て**字門を配して西方大悲の水となすや。答う、是れ金胎の異なるのみ。

『大正』三二・  
一b

433/3

『大正』三二・  
五七三c

『定弘大全』  
五・一二五

円鏡等の名は、本、金界の説にして、『大日経』に説かず。金胎の説異なれども、智体は是れ一なり。故に金の五仏を以て胎藏に寄於して妙觀を水に配し、平等を火に配す。義相違せず、火亦た平等の義有り。『立印軌』に云う、「時に金剛手菩薩は、三摩地より召集の一切声聞、辟支仏、一切の天・能・藥又・乾闥婆・阿素羅・藥嚙・人及び非人・一切群生等を驚覺し、皆來つて集會す。復た彼の群生の差別之心を抽摂して合して同一体にして三摩地に住すを俱胝梵燒世界大威と名く。唯だ一大火聚と成す」云。応に知るべし、此等の差別之冥合して一体となるは、即ち南方平等性智の火聚なり。次に妙觀察智、梵に摩賴妙部羅觀始シ乞シ□察。『菩提心論』に云う、「西方阿弥陀仏は、妙觀智を成ずるに由て、亦蓮花智と名く、故に<sup>觀</sup>字を種となす。又『藏記』に云う、「妙觀察智とは、五眼高臨して邪正を謬まらず、因つて以て名とす」。是れ無量壽尊の大智恵の心なり。蓮花は水従り生するが故に。蓮花を亦<sup>フ</sup>と云う。吉慶第一讚に云う、<sup>吠</sup>闍ハは水生なり。第八に釈して云う、蓮花の異名と文。<sup>フ</sup>之体は、<sup>フ</sup>と同じ。蓮花は即ち般若ハラ蜜にして即ち是れ智恵心なり。又『菩提場経』に、「未敷蓮の印を、般若ハラ蜜の印と名く」。応に併思すべし。又『名義集』第三に、阿伽を円満と翻す。此に水と云う。『釈名』に「水は物を准壽するなり」と文。五眼觀照して邪正を謬まらざる、即ち是れ平準の義なり。次に成所作智とは、梵に迦哩拏所作許吒成と云う。是れ釈迦仏の寂業之智なり。風輪不住の義なり。『藏記』に云う、「成所作智とは、二利応

『大正』三二・  
五七三c

433/4

『定弘大全』  
五・一二四

『大正』三三・  
五七三c

五仏

『大正』一八・  
二九八a

434/1

『大正』三九・  
七〇六a

作の故に所作と曰う、妙業必ず達成するの称なり。『菩提心論』に、「**北**北方の不空成就仏は成所作智を成ずるに由て、亦羯磨智と名く」。『**智**字を種となす。『理趣釈』に云う、「四出生の字と名く」。即ち四出の義なり。即ち羯磨四出の義なり。次に法界体性智とは、梵に達摩駄都界路耶性ゴジヤ枳攬シヤ曇ト智チと云う。中央毘ルサナ満足一切智なり。『藏記』に云う、「法界体性智とは三密差別、数刹塵に過ぐ、之を法界と名く。諸法の所依なるが故に体と曰う。法然不壞の故に名けて性とす。決断分明なるを以て智となることを得る」。『菩提心論』に「中央毘ルサナ仏、法界智を成ずるに由て本となす」と文。夫れ五仏とは、毘ルサナ仏は、色界頂阿迦尼吒天宮に於て、初に受用身、等正覺を成じ、四智を証得し、四智の中従り四仏を流出す。惣じて五仏と成るなり。『出生義』に云う、「大円鏡智に由て厥に金剛平等現等覺身有り、則ち塔の中方の東、阿閼如来なり。平等性智に由て厥に義平等現等覺身、即ち塔中方の南、宝生如来なり。妙觀察智に由て厥に法平等現等覺身有り、即ち塔の中方の南、阿弥陀如来なり。成所作智に由て厥に業平等現等覺身有り、即ち塔中方の北、不空成就如来なり。○是に於て印成せる法界体性自受用身は、即ち塔の正中毘ルサナ如来なり」。(此は無畏菩薩行証入なり) 発心修行等は、謂ゆる因・行・証。入・方便の阿字の五転なり。第十二廿三に云う、「四方は、即ち是れ如来の四智なり。初の阿字門は、即ち是れ菩提の心。次の暗字は、即ち是れ無上覺を成す。次の阿長字は、是れ菩提の行を行ず。次の惡北は、即ち是れ大涅槃なり。其の余の四隅の葉は、

即ち是れ四摂法なり更に其の相を問え。先ず阿字門従り菩提心を発す（即ち是れ真言の来処なり）。次に彼の果を知る（更に次第の意を問え）。次に此は是れ字輪の五の阿字の義に由て大果報を成せんと欲うが故に、而して如来の行を修す。修行を以ての故に而して大涅槃を証することを得る。故に大涅槃を証するが故に、「能く心性を見る、即ち此の心は、法界之体なり。本より来て常に寂滅相なりと知る。故に未後嚧字門なり」と文。第五卷此の文、全く今の次第と同じ。行者の修入に約する故に次第差別す。五転に異なると雖も、実に唯一心なり。故に**𑖀𑖩𑖪**等の五字は、皆な是れ**𑖀**字を体となす。**𑖀**字は、是れ衆生の本心なり。『疏』科文の右五第一に云う、「此の教の諸菩薩は、真語を門とし、自心に菩提を発し、即心に万行を具し、心の正等覚を見、心の大涅槃を証し、方便を発し、淨心の仏国を厳り、因従り果に至る、皆な無所住を以て其の心に住す」と文。又按ずるに大円鏡智等の五智の名は、本『金剛頂』に出でたり。**𑖀𑖩𑖪𑖫𑖬**を、其の種子となす。阿闍仏等を所持の人となし、種子を因となす。其の種を觀て大悲の根となし、五智を証得するを以て方便解脱となる。法有れば、人有る故に、其の仏を阿闍仏等と名くなり。五智は、是れ極果なるが故に、称して果万タラとなす。『大日経』には、五種**𑖀**字を、因・行・証・入・方便と説く。此を称して五智となす。前に第十二の『疏』を引くが如し。**𑖀𑖩𑖪𑖫𑖬**は、是れ五種の菩提、是れ五智なり。其の所持の人を宝幢仏等と云う。五輪を五智と名く、所以に因万タラとなすなり。両部の説相因果異なると雖も、而も実に

『大正』三九・  
七四b

『大正』三九・  
六四五b

『大正』一八・  
二九二a  
『大正』三九・  
七五a

434/4

唯一の心の五転なるが故に一の阿字門に帰す。故に両部の大日俱に**𑖀**字を以て其の種子となし。**𑖀**字は是れ日なり。日を梵に**𑖀**と云う。第十四に云う、「此の中常明とは、即ち是れ大恵日なり。即ち是れ菩提の心、阿字の体、無生無作にして変易有ること無し、造作に由らず、是の如き常住実相の恵なるが故に常明と名くなり」と文。第六に云う、「阿字門に入る如きは、一念法界なるは、是れ毘ルサナの三昧なり」。応に知るべし、**𑖀**字は是れ法界体性毘ルサナの自体なり。此の**𑖀**字を開いて五輪・五智となす。故に之を合すれば則ち一の阿字となす是れなり。是を以て両部差別なれども唯一の**𑖀**字門なり。両部の五仏を阿闍宝幢阿闍宝幢會合するは、金剛界の**𑖀**、此に不動と云う。不動とは、金剛堅固の菩提心なり。『心要』左初丁に云う、「初発信心は菩提心を表するを以て即ち大円鏡智なり」。第十四註に云う、「又字輪、梵に**𑖀**と云う。𑖀利囉輪と云う。𑖀利囉は是れ不動の義なり。不動とは、謂わゆる是れ阿字菩提心なり。梵に**𑖀**と云う。阿闍宝幢、梵には**𑖀**と云う。宝は即ち如意宝珠なり。其の種子は**𑖀**字なり」。經に淨菩提心如意宝と云う。第四註に云う、「東方に宝幢如来を觀ぜよ。○宝幢は是れ發菩提心の義なり」。應に知るべし。其の色は異ると雖も、俱に發菩提心の義なり。阿闍宝字を種となし、宝幢は**𑖀**字を種となし、亦同じく發菩提心の義なり。宝生、梵には**𑖀**と云う。宝は即ち如意宝なり。以て菩提心に喩うる由は、謂く菩提心出生するなり。謂ゆる東方菩提心、万徳開敷娑羅樹王を成ずるを、稱して宝生と云う故に、『禮懺』

に云う、「福德莊嚴身」と。『秘經』に云う、「金剛即宝光」と。即ち此の義なり。『大日經』に云う、「娑羅樹王（花開敷仏）、梵に三矩（上）多（上）と云う」。娑囉樹王を以て菩提心に喩う。花開敷とは、即ち福德莊嚴なり。第四右廿に云う、「始（中）め菩提心の種子より大（根）悲万行を長養せられて、今、南遍（果）覚の万徳の開敷を成ず、以て名となす」と文。『義釈』第七に云う、「此の經宗には、成菩提智を以て花開敷仏となす。両部南方名異にして義一なり。応にこれ进行を思ふべし。觀自在王とは、梵に~~वसुधैव कुटुम्बकम्~~と云う。『理趣釈』右二に云う、「已に一切如来の一切智々を証し、西方瑜伽自在なり。○已証一切如来とは、上の所説に同じく五仏なり。一切智々とは、唯し仏の自証之智なり。皆な瑜伽法と相應せるを以て法に於て自在を獲得す」と文。『禮懺』に云う、「受用智恵身」と文。夫れ一切智々を得て法に於て自在なるは、即ち是れ成菩提の義なり。是を受用果と名く、故に受用智恵身と云う。然るに大日經宗には、此の仏に二義を具す。一には受用果となす。二には方便智と云う。若し因・行・証・入の次第に約せば、南方を行となす。則ち西方を成仏となす。故に第廿卷に云う、「次に花開敷を阿ミタと云うと云うは何んぞや。此は是れ受用仏なり。即ち是れ大果実を成り、其の果を受用し、無量不思議現法之樂なり、故に名を得る。若し南方を成菩提とするに約さば、則ち西方を方便智となす」。第四左廿に云う、「次に西方に於て無量寿仏を觀る。此れは是れ如来の方便智なり。衆生界無尽なるに以るが故に、諸仏の大悲方便にして、亦た終尽無きが故に無量

『大正』三九・七八九c

435/3

五方

寿と名く」と文。金界亦二義有り。蓮花智は、是れ自証なり。転法輪智は、即ち方便智なり。不空成就とは、即ち成所作智なり。淨・穢二土に於て仏事・生事の二業円満するは、之を不空成就と謂う。『大日経』には、天鼓雷音仏と名く、亦た成所作智なり。第廿卷<sup>年十二</sup>に云う、「次に鼓音仏とは、方便なり。既に大果<sup>発心修行に依て得</sup>を得る。是れ自から受用するのみならんや而已、即ち普く一切衆生の為に之を演説す。種々方便、成所成智なり。猶し天鼓之音の思い無く仏事を成ずるが如し。故に名を得るなり」と文。中央毘盧サナ仏とは、両部の説相、名は同じく、義を同なり。胎藏宗の仏は、身色閻浮檀金にして如実相の体を表す(具には第四<sup>左</sup>の釈の如し)。故に<sup>イ</sup>蓮花蔵と説く。是れ所証の理の故に。第五<sup>左</sup>に云う、「此の蓮花台は、是れ実相自然智恵」と文。金界の仏は、其の色純白にして猶し月殿の如し。故に<sup>イ</sup>月輪と説く、即ち能証の智なり。<sup>イ</sup>月輪を以て<sup>イ</sup>蓮花を証す故に、心処心中之心を証すと云う。亦た心自から心を証すと云う。両部異なると雖も、唯だ是れ一心のみなり。是を両部不二と云う。不二は、即ち是れ唯だ一毘盧遮那なるなり。第十六<sup>左二十六</sup>に云う、「此の上<sup>蓮花</sup>一切人中尊有<sup>います</sup>とは、即ち是れ毘盧サナなり。此は是れ行者の自証無師智大毘盧サナなり。外<sup>心内の蓮花生</sup>従り来るに非ざるなり」と文<sup>已上</sup>。

五智<sup>ヲ</sup>為<sup>三</sup>五方<sup>ト</sup>とは、五方は、謂く東南西北中なり。東、梵に<sup>イ</sup>と云う<sup>日と異</sup>。『経音』十二に、連利婆を前と云う。『名義集』第三に云う、「前の一は諸方の前に在り。又翻じて





に云う、「南方は則ち下地と為す。但し阿毘遮魯迦を作すべきのみ」と文。第五<sub>右二十九</sub>に云う、「南を右方となす」と文。東を前とするに約すれば、右は是れ南方なり。金剛部の降伏の三昧なり（問う、第五に三部を釈する中に云う、右方は蓮部、左方は金剛部、何んぞ忽に違するや。答う、胎藏万タラは大日、西に向う故に大日の右を蓮部となし、各一義に抛るのみ）。又第五<sub>左二十五</sub>に云う、「南方閻魔羅」と文。閻魔は、是れ降伏の三昧、死法門の主なり。故に七母等悪行の者を以て其の眷属となすなり。『字書』に云う、「南は那含。切音男火方なり。時に於て夏となす」。又『續字彙』に云う、乃曆反、怒と同思なり、愁なり。梁の簡文の詩に、南音悲を南弄、上の南の字は、字の如く下の南の字は、音怒、漢亦是怒の義を具す。忿怒は、即ち降伏三昧なり。和訓に味奈味と云う、謂く皆な見ゆる義なり。日已に中する時、万物悉く顕る故に味奈味と云うなり。

【北を、梵に烏多羅と云う。是れ勝上の義なり。『翻梵語』の第七に云う、鬱多羅□<sub>勝と曰うなり</sub>。第五<sub>卅</sub>に云う、「北を勝方となす」。『涅槃』第五に云う、「解脱とは無上と名く。譬えば北方の東方に於て無上上となるが如し」と文。北方とは是れ般涅槃の義なり。『智度』卅一に云う、「諸法の中に第一の法を名けて涅槃となす」。又云う、「涅槃有り、是れ第一の宝、無上の法たるが故に」と文。此等の義を以ての故に北を勝方と云うなり。又第五、「北を毘沙門の法と

『大正』一八・  
二九二b

437/2

中

437/1

云う、毘沙門の名は富貴吉祥の義なり。故に吉祥天等無上勝福の者を以て其の眷屬となす。是れ吉祥者の所居の方なるが故に勝方と云うなり。『字書』に云う、「北は必勅の反朔方なり。大陰は北方なり。北は伏なり。陽氣下に伏す、時に於て冬となす。和訓に幾多と云う、謂く来なり。冬至に一陽来復するを君子道長する時となす。即ち是れ勝上吉祥の義なり。仏菩薩、是の如く大涅槃を証すれば、大悲願の故に神力が持を以て普く色身を現んじ、生死界に遍満す。衆生を化度する故に大寂涅槃に準じ、大義建立するを。即ち是れ来復の義なり。第廿卷に云う、「次に鼓音仏とは方便なり。既に大果を得る、是れ自受用するのみならん。即ち普く一切衆生のために之を演説し、種々方便所作智なり。猶し天鼓音の無想にして事業を成ずるが如し、故に名を得るなり。」**甲**とは、四方に対して中と云う。梵に摩耽也**合**は、是れ我の義なり。我は是れ毘ルサナ法性身なり。**乙**とは、謂く法界来の義なり。即ち謂ゆる蓮花台の達摩駄都なり。此の上に主する者とは、内心の大我毘盧サナと称す。第十六**世**に云う、「此の心万タラの上に仏有り、中に在るが故に大我と曰う。大我とは仏の別名なり。又云う、此の上に一切人中尊有り、即ち是れ毘ルサナなり。此は是れ行者の自性無師智なり。又毘ルサナ仏、外従り来るに非ず。『心要』に云う、「此の大菩提五智円満、即ち是れ毘ルサナ如来、真如法界智、処中の位なり」。応に知るべし、**丙****乙**とは、即ち胎藏心なり。中を和訓に奈加と云う、内外は是れ一对なり。内の方を略して奈加と云う。辺の

方カタを保加と云う。外ホカは即ち四辺四辺なり已上。今章の図に五方・五仏を出す。『道範抄』左初に之を出す。朱書に云う、私に云う団形か。此の義爾からず、今は五方に約し、五方の時は、北方団形、東方円形云。再案して東方を円形とし、北方を団形とし、朱を以て図を改む。『疑目』亦同じく、今図は団・円似る故に東・北誤り図ると。之に依て異説等を考合し、今図に同ずる義之無し、破文の如く尚広く之を尋ね決せよ。或る人『疑目』を正となし、亦道範の図、羯磨形印の図等之無し、異本と見たり。

右五輪名等とは、上に『東記』左七を引きて記すが如し。隆重ねて安流極秘阿字黒箱を開き披見するに、阿字に於て四重秘積有り、中の第三重全く今の五方・五仏の図に同なり。彼には五方に各互具と注し、若し爾らば今図は、五方・五仏各具互具の深義を示し、通途の説に非ず。然るに、通途の説を以て破文を加え、冥割恐るべし、恐るべし。惣じて開山、秘義に依るなり。上に述るが如し。然るに憲公の艸子成り上りの解了あがを以て、或る人、『疑目』を信じ、言語に絶すること慎むべし、慎むべし。『即身義冠注』上計四に、六大互具の義を明す、熟読すべし。又今金剛界以<sup>レ</sup>互字等とは、羯磨形人体の体を出す。『東聞』九行に、『即身義』の阿ラヤ識の中に於て金剛界の種子を種える文の解して、今文を引き、行者に約し白淨信心を以て種子となす云。金・台に約せば、<sup>レ</sup>互の二字なり。隆の云う、<sup>レ</sup>互の配釈此れなり。行者に約するなり。何となれば『秘釈』第九三、『密嚴淨土略觀』に云う、「次

に淨満月輪、次に八葉華王あり、上に種子法身あり、体性明淨にして光澤鮮白なり、万徳成就し二利円満せり。種子転じて無所不至の五大所成の法界塔婆と成る」と文。此の中央の種子は㊦字なるべし。下に明す四仏は阿闍等なるが故に、㊦字一字塔、『秘蔵記拾要記』第五に具さに記す、之を略す。【以悉字一字等とは、『阿字秘積』下廿四に云う、第六左三十四に、「次に一偈有り、仏菩提薩の印を信解すれば無量の福聚を得ることを明す故に」云。若し諸の衆生有て此の法教を知る者をば、世人応に供養すること猶し制底を敬う如くすべしと。制底は、是れ生身の舍利の所依なり、是の故に諸天・世人、福祐を祈る者の、皆悉く供養す。若し行人、是の如きの義を信受する者は、(即ち法身の舍利の所依なり)一切世間の供養・恭敬を受けるに堪たり。復次に梵音の制底と質多と体同なり。此の中の秘密は、心を謂いて仏塔とす。(第二の万タラの如きは、自心を以て基いとなす)次第に増加して、乃至中胎の涅槃は、色最も其の上に居す故に、此の制底是は甚だ高し。又中胎八葉従り次第に増加して、乃至第三の随類普門の身の処として遍ぜざること無し。故に此の制底、極めて広し。蓮花台の達摩駄都は、謂ゆる法身之舍利なり。若しは衆生、此の心の菩提の印を解すれば、毘ルサナに同じ。故に世間応供養猶如敬制底也と云うと文。今按ずるに、此の文に依らば、上に菩提の実義を明す。亦五字の義を説くことはれ分明なり。所以に何んとなれば、經に知法教と言うとは、我覺本不生等の法教なり。『疏』に菩提印と云うは、前の菩提の実義なり。

制底とは、塔婆、即ち五字・五輪なり。且く制底に於て二の意有り。生身の舍利所依の義は知り易し。若し行人より下は、法身舎利の所依の義を釈するなり。如是義と言わば云く、此の心菩提印なり。即ち阿字本不生の義なり。是れ則ち法身の舎利なり。彼の義を信受するの行者の身は、是れ法身の舎利を安ずる制底なり。故に知んぬ、心月輪の阿字を觀ずる行者は、是れ即ち舎利を安ずるの塔婆なり。五輪成身・五字嚴身、之を思ふべし。又或は文に云う、「己体に法身の舎利有り、自心即ち性仏の駄都なり」云。良に以て有るなり。復次の釈に謂う、心仏塔とは、此れに又二の意有り。一に心と云うは、阿字菩提心なり。即ち法身舎利なり。仏塔とは、法界万タラなり。此れに亦た二義有り。若しは行者の因中に有り、之を説く。若しは如来の果地有り、之を説く。先ず豎に依るを、行者の因従り果に至る者なり。外従り内に向う、謂く世間の八心を成就せしむるより以来このかた、即ち第三重の外境の位なり。故に自心を基もととなす者、小分守齋の心を自心と云うか。漸く進んで第二・第三重に入り、中台に至るを成仏の果最も其の上に居る故に、此の制底甚高と云う。次に横に如来従本座迹に約さば、内従り外に至る故に、菩提自証の徳を以て自心為本と云うなり。中台従り次第に普門随類の身を流出して処として遍ぜざること無きが故に、此の制底極広と云うなり。此の因中果地万タラは、俱に胎藏の増するが故に、蓮花台達摩駄都と云うなり。故に聖人の記に云う、「胎藏界を達摩駄都と云う」云。此の三重の増、且は其の体を言わば、

『定弘大全』  
五・一三六  
『大正』一八・  
一・九

『大正』三九・  
五八七a  
438/4

皆な**九**字菩提心なるが故に、謂ゆる法身舍利と云うなり。一に云う、此の仏塔は是れ**九**字の所変なり。金剛界の羯磨会等亦三重壇と成るが故に、横・高広の義、前に准じて知るべし。故に『秘藏記』に云う、「率都というは、鏤一字の所変なり。又阿毘羅吽の五字の所成なり」云（此の文を以て上の二義を証す、深義更に問え）。又**九**一字の塔婆、胎に通ずるが故に、『大日経』に云う、「簿伽梵（『疏』に云う、毘盧舍那本地法身）如来加持に住す（『疏』に云う、其の住処を受用身と名く云）、此れ則ち阿字の理法身、**九**字智身に住して。『大日経』を説く故に。「又五字の塔婆は、金に通ずるなり。謂く金剛界の秘印は、五大を以て塔と作す故に」云已上『秘積』。又『遺教録』第一三三に云う、「**九**字五大の義」云。

胎藏界二六以**九**字ノ一字現三五五輪とは、『遺教録』一四三に、『**九**字界秘事』に云う、「**九**字悪字を以て胎藏界大日の種子となす、方便を究竟となす故に」と文。此れ亦**九**字を觀じ、變じて五輪塔と成る。或共以等とは、此れ依報世界觀なり。上に出ずる世界觀なり。『密藏淨土略觀』是れなり。『秘藏記』本七五云。『拾要記』見るべし。『若約行者等とは、上文も行者の觀心なり。何んぞ今、約行者と云うや。謂く以下は正しく行者の自心觀の故に云うなり。』

白淨信心二七とは、『疏』一二六に云う、「菩提心とは即ち是れ自淨信心の義なり。『釈論』亦云う、「仏法の大海には信を以て能入とす」と文。此の意は菩提心の智恵なるが故に、信の心所と相応俱起する心品は發心の体となす。能入の功は信に在り、能く疑惑を度するに智有るなり。

『大正』一八・  
一c  
『大正』三九・  
五八八a  
『大正』三九・  
五七九b

『定弘大全』  
二・三〇七  
『大正』一八・  
一c

『大正』一八・  
二a

『大正』一八・  
四〇b

439/1

為五輪種子とは、下に至つて知るべし。淨菩提心等とは、淨菩提心の体を定むるなり。『經』に云う、「云何んが菩提とならば、謂く如実知自心」と文。云かんとは、徵問なり。菩提とは無上仏果、一切智となり。第一<sup>一</sup>に云う、「心の実相とは、即ち是れ無相菩提なり、亦一切智々と名く」と。第三<sup>三</sup>に云う、「上文、金剛手、直に毘羅刹に問う、云何んが一切智々を得る。仏亦直に答う、実の如く自心を知る。即ち是れ一切智々なり、実の如く了知するを名けて一切知者となす」と文。如実知自心とは、答積す。即ち略して所見処を示す。如実とは、真実の異名なり。知とは、謂く証知の故に、下の『疏』に、「了々証知を成菩提と名くと云う」と文。『疏』第十二<sup>二</sup>に見に積す。『如実知自心章』<sup>二</sup>に疏釈を引きて委解して<sup>云</sup>、見るべし。豎には十重の浅深と顕し、横には塵数の広多を示す。『十住心論』第十<sup>四</sup>の文なり。具文に云う、『經』<sup>住心品</sup>に、「云何んが菩提、謂く如実知自心とは、此の一句に無量の義を含めて、豎には十住の浅深を顕し、横には塵数之広多を示す。又九句の中<sup>第三</sup>心統生の相、諸仏大秘密、我今開示すと云うは、即ち是れ豎の義なり。謂く初め羝羊の闇心従り、漸次に闇に背き、明に向う求上之次第なり。是の如き次第に略して十種有り、上に已に説くが如し」。又云う、<sup>而字集相應品</sup>「復次に三貌三菩提の句を志求するに、心の無量を知るを以ての故に身の無量を知る。身の無量を知る故に智の無量を知る、智の無量を知るが故に即ち衆生の無量を知る、衆生の無量を知るが故に虚空の無量を知る」と。此は即ち横の義なり、

『大正』一八・  
四〇b  
『大正』三九・  
七六九a

『定弘大全』  
二・三二五

と文。如実の云う、『経』に云う、○広多自下の三文は、住心の通名を成ぜんが為に、通じて即ち十住心を説く文を証す。中に於て此の文は、横・豎の義を含む。若し豎の義に約さば方に前九の末の解脱の遮情の菩提心を簡び去るを、方に第十の解脱の遮表、不二の菩提心を取るを具に『五輪九字秘釈』に、直に十住を豎て十重の如実知自心を弁<sup>べん</sup>するが如し。若し横門に就くは、全く是れ表徳の密義なり。謂ゆる地獄・天堂・十界皆な是れ自心仏之名字にして、専捨・専取なり。一々の住心の中の深秘是れなり。文句見るべし。又云○無量とは、『経』第六、百字果相応品の文なり。『疏』十八年<sup>十</sup>に釈して云う、「所以は何かん、一切の法は心に由て而有なり。此に了違すれば即ち法の無量なり、即ち身の無量を知るなり。縁に称して示現之身なり。乃ち機に赴て度門之智も彼に応じて起するをもつて亦復無量なり。一々に虚空に等同なり。身と智と衆生と虚と無量なるを以ての故に、名けて四無量となすなり。此の無量は即ち心従り生するに由るが故に四無量心と名く。若し此の四無量心を得ば、即ち是れ正覚を成ず」と文。按ずるに此の経文は、十界の色心依正の相即不離を明す。言う所の虚空は、即ち五輪中の随一にして住処器界の所依なり。知るべし、夫れ所依の虚空、既に是れ無量無辺なり。能依の心身等も一々彼の虚空界に等同なり<sup>如実</sup>。『阿字秘釈』下<sup>右初</sup>に云う、「問う、阿字本不生并に如実知自心に種有るや。答う、各に種有るなり」。『住心論』第十<sup>冠注</sup>右<sup>四十五</sup>に云う、「且く初<sup>疏</sup>阿字に就て釈せば、世天乃至如来所説の真言に皆な阿字有り。是れ阿字本不生の義なり。

此の不生に於て無量の不生有り。世間咒術の真言は、寒熱等の病を除くに約して不生を説く。護世四王の真言は、疫癘等の不起に約して不生と説く。帝釈の真言は、十不善と災横との不起に訳して義を明す。(初禪天ノ王)梵王の真言は、(五)欲(欲)覺の不起に約して不生と説く。(第四禪天)大自在の真言・声聞の真言は、尽無生智に約して不生と説く。縁覺の真言は、十二因縁の不起に約して不生と説く。諸の菩薩の真言は、各々の(自誦三昧)所通達に約して不生と説く。他縁乗は生法の二空と二淨の不生とに約して義を明す。覺心不生乗は、(主藏等の八)諸戲論の不生に約して義を説く。一道無為乗は、無明不動に約して不生を明し。極無自性は、約して明す○」と文。次に上に引く論の如実知自心豎横の文を引き已つて、今按ず、此れ等の文に依つての故に不生并知心各々多種有るなり。此の中の五種無量亦た阿字の実義なり。故に聖人の記藏密に、身と心と智と衆と空と五種無量とは、即ち五字真言**𑖀𑖄𑖹𑖱𑖨**、地水火風空なり。五智・五仏等なり。次での如く之を配す。『大日經』に、広多と雖も五字真言を以て宗となす。此の五字を詮定し**𑖀𑖄**の二字を以て宗となす。兩部の大日真言の故に、此の詮定は一の**𑖀𑖄**字を以て極となす。次の四字は、是れ此の阿一字転声なるのみ已上上人。私に云う、『大日經』の我覺本不生等の句、大師は五字に配釈す。『疏』中に四句を以て初句の阿字を転釈す、之を思うべし。応に知るべし五種の無量は終に**𑖀𑖄**字に帰す故に**𑖀𑖄**字の実義となすなり已上。『五字口決抄』に云う、「此の五種の無量は、『大日經』に説く。『疏』又之を明す。大師『住心論』に、『大

日経』に無量心の義を説くを釈すは、之を以て本説となす。則ち五字義なり。此の中、心と身は是れ金胎、色心二の故に地水二大なり。智・心上に「」字大智火を説く、故に火大の義なり。衆生因業分の故に風大を「」字にして虚空を「」字文の如し。「」字一字に帰すとは、疏家の多字釈一義なり。五句の文、出過語言已下、阿字門転釈して云えば、即ち之れ「」字地大を中央大日となす所由なり。聖人の相伝、信んずべし。両祖相伝の義なり云。隆の云う、五無量は如実知自心の横門の積なり。此の義有る故に、今、自淨信心を五輪の種子と釈したまうなり。又如実知自心とは、実の如く阿字本不生の義を知る是れなり。又云う、『不生論釈冠註』に具に解す、見るべし。隆の按ずるに、今釈余如已下は、豎横の義、兼て豎の義を明すこと文の如く知るべし。横の義は十住心に通じて如実知自心を許す故に之に就て『木母集』第卅四<sup>「初」</sup>、同廿一<sup>「三」</sup>に、第一住心に於て教益の有無に一ケの論有り。答の義は且く実義を按ずるに教益を許すべし。其の故は、十住心とは大悲台藏四重万タラ、十界の依正を十種心品とす。是の故に四重相の中の建立不同なり。是の故に人・非人・鬼・畜等皆な如来所現なり。第一の住心は三悪趣を体となす。鬼畜等に既に真言有り、寧んぞ此の中の教益に非らずや。若し一行者の進趣の次第に約して之を言わば、最初の凡夫の位に、当体即本有薩埵菩提心の体性なるが故に、最初発心と云う。是れ則ち三悪の体に即し、猶し善に属す故に善悪不分にして猶し悪心に属す。此れ従り以後、更に善心を生じ、三悪の体

を離れ、十心の徳を起す。此の如く昇進して秘密莊嚴心に至る。是を以て『宝鑰』に云う、「九種の心薬は外塵を拂つて迷を廉し、金剛の一宮は内庫を排つて宝を授く」。又『十住心論』に、「如実知自心、此れ是の一句に無量の義を含せり。豎に十住之浅深を踴わし、横に塵数広多を示す」と文。明らかに知んぬ、第一住心、即ち一種の差別乘、又行者、最初発心の位なり。何んぞ必ず起教の所因にして一分の善心無しとせんや。然るに第一住心、一向行悪行とは、且く第二已上の善心に対して爾か云うなり。此の中に実には微少の善心有りと雖も、惣相に約して之を言わば、第一の心は、是れ三悪趣の体なるが故に此の釈を作すなり。又十界と十住心とは、体一にして之を建立す、難答共に許すなり、今之に就て難ずるが如きは、善悪を以て住心を建立する故に、第一は但し悪にして善に非ず。第二以後に初めて善心をつつ。答者は、十心は通善、通悪なり。是れ則ち善悪不二にして邪正即一の故に。一切の善悪を以て万々の体性となす義なり。此の中に豎に約して之を判ずれば、第一は但悪不善、第十は但善不善、中間は亦善亦悪なり。此れ等の義門に約して、故に教門異説にして釈義非一なり。然りと雖も不二門の実義は、十住心に通じて教益存るを不共の教相となす。是れ則ち諸乘は善悪の心性未融の故に邪正輒を殊にして教義を建立の異なり。○**㊦**上人の『五輪九字秘釈』に云う、(余如以下の文を引く、之を略す)。此の釈文を解して云う、「此は十住心に就て如実知自心を明す、其の中に各能所寄齊有るべし。第一の能所は、**余、生国を出し時の**

如きは、三毒の罪業羝羊の妄想に任せば、三途八難に墮すべし。是、所寄齊一向行悪の人なり。実の如く自心の悪業を知つて……一重の如実知自心なり」とは、能寄齊の真言行者の微劣の発心なり。以上は第一住心住の能所位なり。次に「周処が三害を離れ、未生の三途を悔しが如し」とは、所寄齊、第二「如実、持○願」成果<sup>二</sup>は能所寄齊なり（此の処『本母』は錯乱たり、今之を改む）。是れ則ち当分如上の住心を所簡となし、後位の昇進を能簡となす。所簡は所寄齊に擬し、能簡を能寄齊とす。第三「実の如く持齊節食の理を知り、具に時時八閔を受け、倍倍成果を願う」とは、第三住心人道なり。初禅已下第三中は天道なり、此は能寄齊のみなり。漸く火宅の弊を知りて「漸知火宅」以下は第四・五住心、是れ亦能寄齊にして所寄齊を略すなり。「他縁の下は第六なり。寛心<sup>二</sup>の下は第七なり。八・九・十文の如きなり。余如下「出生国<sup>二</sup>時<sup>上</sup>等」とは、『結綱集』上<sup>下</sup>に開山の伝祥なり。『行状記』三卷、是れ亦同じ、披くべし。其の先は柏原<sup>カシハラ</sup>の天皇の苗裔、平氏相馬の将門の属胤、太宰の小貳純朝の末葉。又肥前国府知津<sup>フヂ</sup>の庄の惣追捕使、伊佐の平次兼元、母は橘氏同国豪家、有徳の娘なり。開山年十三にして京師仁和寺に入り、十六歳薙没して寛助大僧正を師とし、二十七歳にして伝法灌頂す。委しくは『結綱集』等に有る故に之を略す。「三毒の罪業」とは、三毒は貪瞋癡なり。罪業とは十悪業なり。「羝羊の妄想に任せて」とは、任とは、打任なり。「羝羊」とは『十住心論』第十辯に云う、「羝羊は是れ畜生の中に性最も下劣なり。但だ水艸と及び姪欲の事を念じ、余は知る所無し。天笠の語法として以て善悪因果を知らず、愚童凡

夫の類に喩う」と文。**妄想**とは、本末に通ずる語なり。『菩提心論』<sup>六</sup>に、「若し覚悟し已んば、妄想止除して種々の法滅する」が云うに准ぜば、此は根本無明を指す。文知んぬべし。『大乘義章』五末<sup>廿三</sup>に云う、「謬執して真ならざる、是を名けて妄とす。妄心想を取る、之を名けて想と云う」と文。此は本末に通ずるか。『菩提心論』<sup>右三</sup>に云う、「但だ妄想顛倒の執著を以て証得せず、若し妄想を離れぬれば一切智・自然智・無礙智則ち現前するを得る」と文。此は虚妄分別、煩惱・所知二障なり。煩惱は理を障し、所知は智を障す、故に理智証得せず。文の相對を按んじ、下に無明を挙る故に、今は本末に通じ、惣じて妄想と云うか。

**三途八難に墮すべし**とは、『住心論』第一<sup>廿六</sup>に云う、「羝羊凡夫、所動の身口意業は、皆な是れ惡業なり。身の惡業に三有り、謂く殺・盜・姪なり。口の惡業に四有り、語の妄語・麁惡・無離間・無義是なり。意の惡業に三有り、謂く貪・瞋・癡是れなり。是の如き十種の惡業は一一皆な三惡道の果を招く」と文。<sup>見論に具載す。</sup>又云う、「十惡を本として無量の惡業有り。此の惡業に乗じて無量の惡報を感ず。惡報無量なりと雖も三趣を出でず。謂ゆる地獄・餓鬼・傍生なり」と文。此等の文を以て今釈を知るべし。**八難**とは、『大乘義章』八末<sup>廿五</sup>に云う、「八難と言うは、一には是れ地獄、二には是れ畜生、三には餓鬼、四には盲聾瘖瘂、五には世智弁聰、六には仏前仏後、七には鬱单越国、八には長寿天なり。初の三と後の一と趣に就いて名を彰す。中に於て初の三は全て三趣に撰す。是の故に直に地獄・畜生・餓鬼難と言う。

『定弘大全』  
二・一〇

『大正』三二一・  
五七三a

第八の一難は天趣を尽さず。長寿之に別なり。是の故に名て長寿天難となす。盲聾瘖瘂と世智弁聰とは当体に各三。正しく盲聾・世智弁聰を用いて以て難とするが故に。仏前仏後には時に就て名を彰す。鬱単の一難は処別にして号となす。此の八種能く聖道を得る故に名けて難となす」と文。尚、五門を以て広く分別す。又『探玄』第八下九、『大論』卅八下三三等云。『実の如く自心の悪業を知る』とは、開山『行状記』等見るべし。『無明の父母之家を別れし自り』とは、開山歳十三歳の時なり。『本母』に准ぜば、如実知己下を能寄齊となす。無明父母となす文処、未だ考えられず。『住心論』第一三群三に云う、「無始生死とは、『智度論』三十三に云う、世間の若しは衆生、若しは法、皆な始有ること無し。経の中に、仏の言く、無明に覆われ、愛に繋がれて生死に往來すること始め不可得なり、乃至菩提は無始も觀すれども亦空なり、而と有始の見の中に墮せず」と文。此は十二因縁を説く文なり冠註に弁す。此等の文意に依りて父母の家を無明と云うか、更に考えよ。『已來に更に名利の心を捨て』等とは、開山得度已來別して修行専らの故に父母の家に別れしより重ねて更にと云う。『菩提心論』三に云う、「凡夫は名聞資生之具に執著して、務るに妄心を以て恣ままに三毒五欲を行す。真言行人は誠に厭患すべし、誠に棄捨すべし」と文。此の文意なり。此の文に准じ、今、名利を挙げて余を顯すか。名聞とは、『文句記』一之二に云う、「名は己が名、聞は他聞」と文。『深く無尽莊嚴恒沙の已有を信ず』とは、此の中の莊嚴とは、万タラ界会の莊嚴、三無尽莊嚴藏なり。『十住心論』第十三群三に云う、

「秘密莊嚴住心とは、即ち是れ究竟一切賢人じて自心之源底を覚知し、実の如く自身之數量を証悟す」

と文。此の意は秘密莊嚴とは、謂く三密を以て莊嚴して美麗ならしむるが故に、或は略して密嚴と云う。自心之源底とは、行者の自己心、爾して本、法性の源底を覚知し、実の如く衆生の色身周遍法界を悟り、其の覚知する所の体は、即ち両部万タラなり。此の万タラに四種有り、謂わゆる大・三・法・羯なり。是の如き四種万タラ、其の數無量なり、刹塵も喩に非ず、海適も何んぞ比せん。故に無尽恒沙と云う。然るに此の万徳の開山は自己心に本より之有りと深信したまうなり。是れ則ち秘密の教を信する義なり。『宝鑰』下三十に云う、

「九種住心は自性無し、転深転妙なれども皆な是れ因なり。真言密教は法身の説、秘密金剛は最勝の具なり、五相五智法界体 四曼四印此の心に陳ず、刹塵の渤駄は吾が心の仏なり 海適の金蓮は亦我が身なり 一一の字門に万像を含み、一々の刀金皆な神を現す 万徳の自性輪円して足れり、一生の莊嚴の仁を証するを得べし」と文。能く此の文の意を得る、今正有の意味を解すべし。之を弁ずるに違わざれ。是れ則ち一重の如実知自心なり」とは、一

重とは一分と云う如し、本不生重々有るが如し、今亦同なり。之に依つて此の一重の言は下に流すべし。今信とは信知の一分なり。是れ上に弁するが如く横門の義なり。周処が三害

を離れ、未生の三途を悔しが如く、実の如く持齋節食之理を知り○実の如く自心を知るは、第二任心人乘なり。或る説に、雖然の下は第三住心となす。依るべからず。文処に至つて示すべし。

『定弘大全』  
三・二〇〇

『定弘大全』  
七・四六

442/3

442/4

〔如周処〕等とは、以下の文解し難し。『宝鑰』上五九云う、「載淵心を改め、周処忠孝あつしが如くに至りては」と文。此れは物に定性無き義を人に約し、知通必改の義を明す故に、人を挙げて比説するなり。『三教指帰』に云う、「載淵、心を改めて將軍の位に登り、周処、志を改めて忠孝の名を得たり」と文。二人の本伝等は、『竹解』等に引が如し。今は少しく意異なるなり。周処は『宝鑰』に同じ、今は現在心改なり。〔末生〕は、未来苦を恐る。末由とは、經の『意義』廿五丁五に云う、「阿闍世王、此に未生恐王と云う」と文。未生因縁は『涅槃』梵行品之四七會疏初下。同品之五八會疏第に広く明す。經に曰く、「爾時に王舎大城の阿闍世王、其の性弊悪なり。喜んで殺戮せつりくを行じ、口の四過を具し、貪恚・愚痴ぐち、其の心熾盛なり。唯だ現在を見、未来を見ず。純ら悪人を以て而も眷属なす。現世の五欲の樂に貪著するが故に。又の王辜ツミ無きを横に逆害を加え、父を害し已るに因て悔熱を生じ、身の諸の纏絡・妓樂御せず、心悔熱するが故に体に偏して癩かさを生ず。其の疾臭穢にして附近ふじんすべからず。尋自念言すらく、我れ今の身に已に花報を受たり、地獄の果報將まさに近ちかづかんとして遠からず。爾の時に其の母韋提希后、種々の藥を以て為に之を塗る。其の瘡遂に増して降損有ること無し。王即ち母に白のたまく、是の如くの瘡は心従り而生せり。四大の起るに非ず。若しは衆生、能く治する者有りと言わば、是の処こゝり有ること無し」と文。王、罪を作ると雖も心に重悔を生ず、而して慚愧を懷く故に後に老婆之勸誘に由て仏処こゝに到り、教化を蒙まむり、菩提心を発し、広く云。

隆の云う、如字は例如なり。謂く周処現在に心を改め、三害を離れ未生悔は未来三途の苦  
恐するが如し。開山も実の如く持斉節食之理を知りたまう為言。若し爾らば如くと訓ずるも  
可なり。如きと訓ぜば、周処と未生の持斉節食を知るに成る故に、何んいづにとは、次上の開  
山出国已来、善心の相續を明す故に。

〈キーワード〉五部、五智、五方